

第 23 回天気予報研究会次第

テーマ「集中豪雨に備える防災気象情報の使い方」

日時：2026 年 2 月 15 日(日) 13 時 15 分～16 時 15 分（受付開始：12 時 45 分）

開催方法：「日本気象協会 会議室 RoomC」で開催し、オンライン（Zoom ウェビナー）を使用するハイブリッド形式。参加方法などについては、学会 HP の研究連絡会のお知らせ（<https://www.metsoc.jp/category/news/research-group>）に掲載します。

（挨拶） 13：15～13：20

（連絡事項） 13：20～13：25

（講演）

1. 新しい防災気象情報の概要

兒玉 真（気象庁 大気海洋部 気象リスク対策課） 13：25～13：55

2. 「防災気象情報に関する検討会」での議論を振り返って

牛山 素行（静岡大学防災総合センター） 13：55～14：25

3. 新しい防災気象情報を支える集中豪雨の予想技術

～局地モデルの高解像度化と局地アンサンブル予報システムの運用開始～

荒波 恒平（気象庁情報基盤部数値予報課） 14：25～14：55

休憩 14：55～15：05

4. 新しい防災気象情報の伝え方

伊藤 みゆき（NHK ラジオ気象キャスター） 15：05～15：35

5. 市町村から見た新しい防災気象情報の意義と課題

弘中 秀治（宇部市総務部） 15：35～16：05

質疑応答 16：05～16：15

主催：日本気象学会天気予報研究連絡会

後援：一般財団法人日本気象協会

第 23 回天気予報研究会講演要旨

テーマ「集中豪雨に備える防災気象情報の使い方」

1. 新しい防災気象情報の概要

児玉 真（気象庁 大気海洋部 気象リスク対策課）

国土交通省水管理・国土保全局と気象庁では、令和6年6月に取りまとめられた「防災気象情報に関する検討会」の提言をふまえ、新たな防災気象情報の運用に向けた準備を鋭意進めている。その運用開始は令和8年5月下旬頃を予定している。

新たな防災気象情報では、5段階の警戒レベルと合わせて大雨などの災害発生の危険度の高まりに応じてレベルの数字を付して情報を発表すること、河川氾濫の特別警報を新たに開始すること、警戒レベル4相当情報として危険警報を運用すること、既存の気象情報を気象防災速報と気象解説情報に分類することなど、現行のものとは大きく変更される。本研究会では、上記のような新たな防災気象情報の改善・変更点等について概説する。

2. 「防災気象情報に関する検討会」での議論を振り返って

牛山 素行（静岡大学防災総合センター）

2022年1月から2024年6月にかけて、気象庁は「防災気象情報に関する検討会」を開催した。報告者は同会に、当初は委員、後半では副座長、2022年11月～2023年9月に同会の下におかれたサブワーキンググループでは座長として議論に参加した。2年半にわたる議論があったことを、長すぎると感じる向きもあるかもしれない。防災気象情報や自治体の出す避難情報（避難指示などの情報）は、目立った災害が起こる都度、いわばパッチワーク的な改定が繰り返されており、情報体系全体を見渡した検討が十分行われていないことが課題でもあった。避難情報に関する議論が一段落してきたという背景もあり、同検討会では、拙速な議論は戒め、防災気象情報について俯瞰的な観点から十分な議論を尽くすことを目指した。しかしそれでも、それぞれの立場や専門性などにより、「このような情報がよい」といった見方は実に多岐多様にわたるということを痛感した。残念ながら、まだまだ課題は少なくないというのが現実かもしれない。本報告では、同検討会の議論のあらましを紹介した上で、防災気象情報の今後に関する私見を述べたい。

3. 新しい防災気象情報を支える集中豪雨の予想技術

～局地モデルの高解像度化と局地アンサンブル予報システムの運用開始～

荒波 恒平（気象庁情報基盤部数値予報課）

気象庁では「2030年に向けた数値予報技術開発重点計画」に沿って技術開発に取り組んでいる。その重点目標の一つである「豪雨防災」への貢献を目的として、スーパーコンピュータ「富岳」の活用や線状降水帯予測スーパーコンピュータの導入により開発を加速化

し、令和7年度末に、当初の予定を大幅に前倒しして局地モデル（LFM）の水平高解像度化（2km→1km）と、局地アンサンブル予報システム（LEPS）の運用開始を計画している。講演では、LFM 高解像度化及び LEPS の開発成果や予測特性等を紹介する。

4. 新しい防災気象情報の伝え方

伊藤みゆき（NHK ラジオ気象キャスター）

来年度出水期から大雨、土砂災害及び高潮に関する情報等が5段階の警戒レベルに対応した情報に設定され、①数字を用いたレベル別、② レベル4相当情報としての「危険警報」の運用、③気象防災速報と気象解説情報の新設、④河川氾濫に関する特別警報の新設、など大きく変わります。個人的にはこの新情報は、2013年の特別警報運用以来の大きな変化と感じております。10年近く前のこの場で「ラジオで情報を伝えるときにレベル別など簡潔に意思疎通できるとありがたい」という希望をお話ししましたが、簡潔に意思疎通できるまでの過渡期が続く中で大きな前進になる期待もあります。一方で、これまでの情報が集約されたり、新たな名称・情報に変わったりなどのとまどいもあります。私はラジオという「色が使えないメディア」での解説が主なので、様々な立場のキャスターや予報士からもアンケートをとらせて頂き、新情報への思いを発表させていただきます。

5. 市町村から見た新しい防災気象情報の意義と課題

弘中秀治（宇部市総務部）

令和8年出水期から運用される「新しい防災気象情報」は、4種類の災害種別ごとに、災害発生の危険度の高まりに応じて、住民の避難行動と対応した5段階の警戒レベルに統一された。これは、情報の「分かりやすさ・使いやすさ」の面で大きく改善されたものであり、市町村にとっても「迷わず判断できる」仕組みとなっている点は、非常に評価できる。

また、住民にとっては新しい用語や表現に慣れるまで一定の混乱が生じる可能性はあるものの、全体としては「分かりやすく、行動につながりやすい」内容になっていると考えられる。今後、情報が頻繁に変更されることなく、定着していくことを期待したい。

一方で、住民の中には自宅や地域の災害リスクを十分に理解していない人も多いのが現状であり、情報の分かりやすさや使いやすさを向上させるだけでは限界がある。「その情報を住民が正しく受け止め、活用できるか」、すなわち「自分や家族の命を守る行動につながられるか」という点については、引き続き課題解決に向けて努力していきたい。